

16
バングラデシュ

ダッカ庶民の遊びと生活

村山真弓

人間は遊ぶ存在であると言ったのは、オランダの文化史家・言語学者ホイジンガだったか、まさに、人がいるところに遊びあり。バングラデシュのように貧しい国では、何にもまして、生きるための闘いこそが死活問題であるとしても、むしろそれだからこそ遊びの部分が重要なのであるともいえる。

共通の娯楽は　ダッカの住民といっても、一握りのお金持ちから、物乞いまで、遊びの量も質もさまざまである。ただし、あらゆる職業、階層の人々に共通する余暇の

おしゃべり

過ごし方はアッダ（ベンガル語で「おしゃべり」）をすることである。アッダ

というのは本来は「居住する場所」、「巢窟」などを意味する言葉であったが、そこから転じて今では「おしゃべり」、しかもお日さまの下でするような明るい駄弁りを指して使われるよう

になった。

バングラデシユ人のアツダ好きは、当人たちも熟知しているようで、バングラデシユの名物などと自己分析したりする。街角のあちこちで、お茶をのみながら、政治談義から人の噂話までさまざまな話題でアツダに興ずる人々の姿がみられる。日本人の苦手とする抽象論を滔滔と繰り広げるバングラデシユ人の話術は、日々のアツダで培われたものかもしれないと思えたりもする。

バングラデシユの人々の家に招かれると、七時頃から行っても、夕食の出て来るのは十時近くなどということがよくある。その間、イスラム教の禁酒のお国柄では、食前酒はなく、せいぜいソフトドリンクで延々とおしゃべりをするのだが、われわれ日本人にとっては、何となく手持ち無沙汰の感をぬぐえない。食事中は黙々と食べ、終わるとさっと引きあげる人も多い。日本とは逆の感覚ともいえる。

食事の招待に限らず、バングラデシユの家庭を訪ねると、家のお年寄りから子供たちまで、入れ替わり立ち替わりあらわれて、話の相手になろうというそぶりでじっと座っている。こちらとしては、かえって話題を見つけるのに苦労することもしばしばだが、おしゃべりは大切なもてなしの要素であり、客に対する礼儀であると考えられているのであろう。こうした社会、家庭環境で育つバングラデシユの子供たちは、それぞれ異なる年齢、背景の人々との接し方を

自然に身につけていられるように見受けられる。

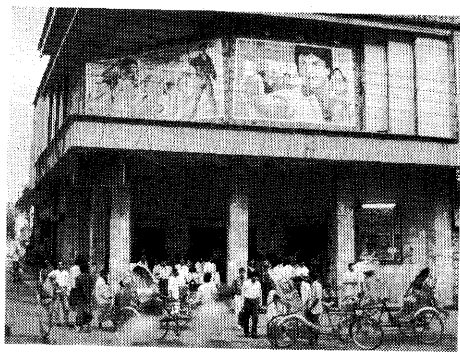
散策・行楽・旅行

休日である金曜日などには、家族連れで散策を楽しむ人々が多い。ダッカで人気のある行楽スポットといえば、動物園、植物園、遊園地それに国会議事堂周辺のエリアである。議事堂周辺以外は有料であるが、入場料は一人当たり三タカ（およそ一〇円）と安いので、幅広い所得階層の人々がそこを訪れる。もともと資金不足ゆえにそれらの施設はかなり荒れている部分も多く、遊園地にある観覧車などは、とうに耐久年数を越えていると聞く。ちなみに遊園地の汽車は「弁慶号」と銘打つてある。日本のどこの遊園地からでも贈られたものであろうか。最近の日本の日本の遊園地では汽車などはあまり目立たない存在のようだが、この「弁慶号」はダッカで人気を集めて、幸せな第二の人生をおくっている。ダッカの北方およそ車で三十分ほどの独立戦争戦没者の記念碑を訪れる人も跡を絶たない。その近くには、土で作った動物の人形や、素焼の壺などを売る露店がたくさん出ている。もつと遠出して宿泊付きの旅行となると、行く人も行き先も限られてくる。交通機関、宿泊施設ともに、条件があまりよいとはいえないからである。唯一の例外は、ベンガル湾に面したコックス・バザール地域で、その売り物は非常に長い海岸線である。ホテルもさまざまランクで複数あり、実際のところは分からないが、新婚旅行のメッカともいわれている。しかし通常の遠出は、故郷の親類縁者を訪ねるといのが一般的である。

衰退傾向の映画産業

産業としての娯楽はきわめて少ない。その筆頭として挙げられるのは映画産業であろう。ダッカにはかなりの数の映画館があり、ベンガル語、英語の映画が常時上映されている。

ダッカで最初の映画館は、第一次世界大戦の初期にイギリス人のジュート商人によって設立された。またバン格拉デシュ人による最初の映画が製作されたのは、一九二七年あるいは二八年と伝えられる。「良い娘」と題されたこのショートフィルムヒロインは男性によって演じられたものである。その後映画製作は急速に発展し、六〇年代に登場した Akhtar Jang Kardar や Zahir Raihan の作品は、国際的にも高い評価を得た。ところが、バン格拉デシュ独立以後の映画界は、歌や踊りが中心の娯楽映画が主体となつてしまい、初期の芸術性や社会性は薄れてしまった。これは、六四年からテレビ放送が開始され、高所得者あるいは知識階層の映画離れが進んだこと、またそれによって映画の主たる観客層となつた低所得者が、現実とは一歩距離を置いた純粋な娯楽物を求めたことによるところが大きい。



ダッカの映画館

い。

急成長のテレビ、

ビデオ、衛星放送

テレビ放送は、チャンネルは一つで、平日は夕方五時から十二時まで、金曜日は一日中放映されている。ニュース、ドラマ、クイズ番組、討論会、宗教番組などバラエティのあるプログラムが組まれているが、人気があるのは、「マックガイバー」、「ビル・コーズビー・ショー」などのアメリカ番組であった。日本の「おしん」も週に一度放映され、バン格拉デシュと日本の家族関係の近似性に対する共感をベースに、おしんが貧困から努力して成功していくさまが異常な人気を呼んでいた。一九九二年の十月からはCNNの放送が試験的に開始され話題を呼んだ。

一九九二年現在バン格拉デシュ全体で登録されているテレビの保有台数は約六〇万台（うちカラーテレビ一五万台）。その大部分がダッカを始めとする大都市に集中していて、テレビはいまだ多くの人にとっては高嶺の花なのである。しかしテレビ文化の浸透はダッカでは急速であった。そして八〇年代になってからはビデオの普及が進展し、ビデオのレンタルショップが雨後の筍のごとく増加した。こうしたレンタルショップではビデオデッキも貸し出しており、何人かが共同出資してビデオを観賞できる機会を提供している。人気ビデオはアメリカ映画、ヒンディー映画である。

そして、一九九〇年代の象徴は衛星放送である。当初は一部のお金持ちが外国からディッシ

ユアンテナを購入してきただけであつたが、今では国産のアンテナも販売されており、より身近なものになってきた。新聞には香港のスターTVの番組欄も掲載されるようになっていゝ。発展途上国の大都市が、国内の他の地域とは隔絶され、先進国の文化、情報に直結する現実が、バングラデシュにおいても驚くべきスピードで進んでいる。

スポーツ観戦に熱狂

アウトドアスポーツも盛んである。一般的なのは、サッカー（バングラデシュではフットボールと呼ばれている）、クリケット、バドミントン等である。ダッカ大学でも学部対抗クリケット試合が催されているが、テレビでクリケットの世界大会が放映されたときなどには、授業を休みにする教師もいるくらいで、日本の早慶戦以上かもしれない。サッカーはプロのチームもあり、人気チームの試合となると観客が興奮して乱闘騒ぎになることも少なくない。熱血しやすいのが、バングラデシュ人気質とでも言おうか。

*

バングラデシュに暮らす外国人や少数の金持ちからは、娯楽の少なさに対する不満がよく出される。彼らはもっぱら会員制のクラブや、ゴルフ、私的なパーティなどで余暇を過ごしている。あるいはより多くの娯楽を求めてバンコク、シンガポールへ向かう。

（むらやま まゆみ／アジア経済研究所経済開発分析プロジェクト・チーム）